The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	前號「下河邊長流と懐徳堂」の追記
Author(s)	羽倉, 敬尚
Citation	懐徳. 1974, 44, p. 11-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

前號「下河邊長流と懷德堂」の追記

羽倉敬尚

蘭洲筆
松ガ遐年
ヲ契ル
常磐木の松の緑
が永年青々と變
らぬこと

波ならぬ　契りも深き　末の松
千とせをかけて　超えぬべら也　純貞（五井蘭洲の名）
百人一首清原元輔（清少納言の父）の「契りきな、
かたみに（お互いに）袖を、しぼりつつ、末の松山、
波こさじとは」の歌意をとつたもの、「末の松山」
は青森縣の海岸の松林

本誌前號の、大阪の草わけ國學者、下河邊長流、殊にその、大正末年、同學故人の盡力でなされた建墓の經過を述べ、その中には長流の門人、五井持軒（贈從五位）を叙べ、その子、蘭洲（元祿十〔一六九七〕―寶曆十二〔一七六二〕）については、西村天囚子の名著、懷德堂考（以下、「考」と略す）の記述の一部を引用したに止めたが、蘭洲は父祖の學を受け、學堂書院の初期、基礎未だ成らなかった時代、約二十年間循々教えて倦まずと云った風で、その質實業績は甚大

で、考にも

當時の懷德堂を說く者、重きを石庵（三宅、創學最初約五年間の學主）甃庵（中井、書院創立の事務的功者で、學校預り人、師、石庵沒後の學主）に置きて、蘭洲の功を知る者稀なり。これ蘭洲の書院に於ける、常に助敎の地位に甘んじて、未だ一度も名を表面に表はさざりしを以てなり。然れども蘭洲は、學主、預り人にこそ爲らざれ、書院の敎育に關しては、決して石庵シュウ庵の下に、在らざるのみならず、大阪文學の根柢を養いし上につきては、その功績殆んど二人の上にあり

と述べておる。かくてこの蘭洲の學を受けたのは、實にしゅう庵の二駿兒、卽ち後の大儒、中井竹山・履軒の兄弟であったのである。

蘭洲の學は、父祖を受け和漢兼該で、しかも何れにも深く詳らかで、その著錄を見るも、漢書の外、萬葉集詁、古今集通廿卷、勢語通四卷、源語こ、源語提要、和歌新題百首の如き和學書が見られる。私の前稿には、他の者については、和歌の作品、短冊等をあげ乍ら、この蘭洲をあげずに終ったが、偶然、蘭洲の短冊を入手したから、ここに載せておく、

終りに、明治・大正時代、書院再興等の機會に、書院の文功者に贈位の榮典を受けたが、竹山は正四位、弟履軒は從四位、創學初期の功者としては、石庵、しゅう庵、及び蘭洲と、掉尾の並河華翁（初號寒泉）の四儒が各々正五位を贈られた、蓋し至當の旌表であろう。

蘭洲の墓は、門人の住友分家、入江育齊によって、東寺町實相寺、住友墓域にあり、文は中井竹山、題は弟、履軒筆の篆書である、不幸、碑面磨滅したが、幸い文は速訪碑錄におさめられて傳っておる。